

ミュージアムパーク茨城県自然博物館  
令和2年度第2回博物館協議会の開催結果概要

1 博物館協議会の概要

当館の博物館協議会は、博物館法第20条の規定に基づく法定組織であり、茨城県博物館協議会条例により設置されている。

委員は13名で、任期は2年となっている。うち1名は一般公募により選出されている。

会議は、委員長によって招集され、通常年2回開催している。

博物館法

第20条 公立博物館に、博物館協議会を置くことができる。

2 博物館協議会は、博物館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関とする。

2 日時

令和3年3月3日（水）14時00分～15時50分

3 場所

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 セミナーハウスA

4 出席者

田切美智雄委員、田中ひとみ委員、豊田雅之委員、生田目美紀委員、濱野一美委員、樋口正信委員、町田 満委員、鷺田美加委員

※事務局出席者

横山一己館長、熊田勝幸参事兼副館長、小川均副参事、北條薫管理課長、泉水正和企画課長、小池 渉教育課長、中寫政明資料課長、小幡和男首席学芸員、大崎昌幸係長、鵜沢美穂子副主任学芸員、高橋優華主任、檜山 諒主事、塙 翔太郎主任（教育庁総務企画部文化課）

5 議事概要

(1) 館長挨拶：

先日土曜日の化石展のオープニングセレモニーに7名の委員の皆さんにお越しいただき、感謝している。前回の協議会から3か月しか経っていないが、その間、新型コロナウイルス

対策のため 3 週間の臨時休館を余儀なくされ、ブナ展が途中で終わってしまったことが一番大きなダメージだった。その中で、深海展、狩展、ブナ展の企画展の資料を常設展に順次移している。予算要求はしているが大きな予算は付きづらいので、企画展の資料で少しでも常設展を新しくしていきたい。野外でも、さくら展の後に野生のサクラを追加したり、宮沢賢治展の看板をまだ野外に残したりしている。この 3 月中旬からさくら展と宮沢賢治展のマップを再び配布して、できるだけ野外を見てもらおうと思っている。ぼったの原の川の周辺の整備も多くの職員で進めている。生きものが出て、子どもたちがなるべく楽しめる野外にしたい。現在、コロナの影響でトランポリンが使えず、化石のクリーニングもできない代わりに、自然を観察できるようにしてある。コロナの影響がこれから一年くらい続くのではないかと予想しているが、子どもたちにも分かりやすい展示になるよう努力していきたい。

この博物館協議会は、当館にとって一番重要な会議。皆さんの意見を取り入れて、博物館運営に生かしていきたい。

#### (2) 委員長挨拶：

前回から議長を拝命しているが、前回、委員の皆さんから非常に闊達なご意見をいただき、少し長引いてしまった。今回は少し委員が少ないが、前回に負けにくい程度の忌憚なきご意見をいただき、英知を集めて、博物館にぶつけていただければと思う。

#### (3) 議案説明（事務局）

##### 議題

- ① 令和2年度後期事業の報告について
- ② 令和3年度事業計画について
- ③ 予算・決算などについて
- ④ その他

#### (4) 質疑・意見交換

○議題 ①～④について

##### A 委員：

パワーポイントの最後の方の歳入について、令和2年度に助成金の大きな歳入があるが、近年このような例があったか伺いたい。

##### 事務局：

今年度は深海展の船の科学館からの助成金を得ている。平成27年度以降はこのような助

成金は受けていなかった。

B 委員：

化石展のオープニングセレモニーに招待いただき感謝している。学芸員や職員の若い熱意を感じて、嬉しかった。毎回、視覚的な注意を引くアイデアがたくさんあって、皆さんで相当研究されてきているのではないかと思う。特に発掘現場がスケールが大きくてとても良かった。実際に疑似体験できるのが楽しかった。以前いただいた A・MUSEUM104 号の館長のコラムで、これまでの企画展の資料を常設展に移設する例があると知った。これまで来られなかった人にも、良いと思い、感動した。孫も、深海のテレビを見ていて、「ミュージアムパークにダイオウイカいるよね。」と言っていた。子どもにも記憶に残るのだなと思った。テレビやラジオでもミュージアムパークの案内をしていると思う。アンケートのグラフで、一人での来館者が増加している。これには個人に対する広告が効いているのではないかと思う。PR に関して伺いたい。

事務局：

当館の広報活動について、新聞広告やテレビ CM などの有料での広報はあまり行っていない。NHK などの番組や報道で当館のことを取り上げてもらう機会があり、そういうものを見た方が博物館に来館してくれているのではと思っている。最近 Twitter を始めたが、SNS を積極的に活用して、経費をかけずに効果的な広報を行えるよう努めている。

A 委員：

企画展の回数について質問したい。4 回から 3 回に減ったのか？

事務局：

年度をまたぐ企画展があるので、4 回あるように見えてしまったが、年度あたり 3 回の企画展を開催している。毎年変更はない。

A 委員：

入館者が減少したのはコロナの影響だと思うが、特に減少した無料入館者にはどのような人がいるのか。

事務局：

無料入館者には、県内の学校団体、未就学児がある。無料入館者が減っているのは、学校団体が来館を控えるとともに、密を防ぐために当館からも平日の団体予約数を制限していることが影響していると思う。

A 委員：

来年度の予想はつくか。

事務局：

今年の秋は、学校からの要望があっても、人数制限でお断りしたケースもあったので、無料入館者数が落ち込んだと思われる。また、状況の変化により、キャンセルも多かった。これからも目一杯受け入れられることにはならないと思うため、例年よりも大幅に少ない人数になることが予想される。

A 委員：

県外の来館者がどのようなきっかけで来館しているかリサーチしているか。県内は県の広報誌などで博物館を知る機会も多いと思うが。

事務局：

県内と県外で分けて、来館のきっかけを集計していないのでわからないが、全体でのアンケート結果では、「インターネット」と「人から聞いた」を合わせると60%近くになり、HP、クチコミ、SNSなどがきっかけで来館していることが多いと考えている。

C 委員：

コロナで確かに入館者数は減少しているが、アンケートを見ると、リピーターで保っている印象がある。

D 委員：

コロナ禍で改めて、博物館が人と自然をつないでくれる、かけがえのない存在だと思っている。教育のキーワードは「つなぐ」だと感じる。博物館にとっても、今まで以上に「つながる」という部分にご注力いただきたい。マンモス通信に館長がコラムを書いたり、職員個人の活動を紹介していたり、企画展の苦労話、裏話が書かれたりしていて、それを知ると、深い博物館のファンになる。人の温かみに触れる機会を随所に作ってくれて、それが非常に効果的に働いていると思うので是非続けて欲しい。また、館内に「一覧性」があるのが良いと思っている。博物館は恐竜以外にも色々あり、地域の標本など、繋がっている自然を一覧できるのが良い。1つの企画展で作られた「かけら」が館内随所にあり、全部が「繋がっている感」があるのが良い。アウトリーチについて、同じ県内の教育施設でも、図書館と歴史館、博物館では来館する人種が全く違う。人種の交わりを起こしてくれるのがアウトリーチ事業。アウトリーチをこのまま是非積極的に進めて欲しい。ジュニア学芸員の男女比について聞きたい。養成講座の写真をみると男子が多いようだが。

事務局：

ジュニア学芸員の男女比は同じくらい。年によって違うが、男子に偏っていることはなく、女子が多いときもあった。

E 委員：

ブナ展を前回ご案内いただいて、とても良い展示だった。もう一回見たいと思っていたが、休館になってしまって残念。1回で見きれないほどの豊富な内容で感銘を受けた。企画展の内容が常設展に移っていくのは素晴らしいこと。作った資料が有効に活用されて多くの人の目に触れることができる。入館者数がコロナ禍で半分くらいになってしまったのは致し方ない。その中でリピーターが85%というのは素晴らしい。博物館のファンの方々が支持してくれて、見たことを発信してくれれば、博物館に触れることができるので、リピーターの方の存在をこれからも大事にされると良い。会員組織へのサービスもこまめにされると良いと思う。コロナ禍の中で、「自然に触れたい」欲求・ニーズが高まっている。観光に行けない分、身近な自然への気付きが増えている。子どもたちは年代によって感じ方も違う。幼児、小学生、中学生と、それぞれの年代で機会がもっと充実したら良いと思う。子どもたちにはリアルなものを見せて感じてもらいたい。ぼったの原の整備をされたことも嬉しく思う。子どもたちはバッタが大好き。Twitterでリアルな自然情報を伝えられると良い。こういった活動についてボランティアの存在はとても大きな力になる。これからボランティア活動の再開はどうされる予定か。

事務局：

緊急事態宣言下では活動を休止するなど、コロナ禍の中で、ボランティア活動を制限せざるを得ない状況にある。現在は、少人数での活動を一部で再開しているが、来館者と直接接する活動はまだ自粛している。ボランティアには高齢者、県外者が多いため。資料整理や野外の調査から活動を再開している。

E 委員：

ボランティアの目は、学芸員と一般の人の中間という意味で、とても大事。ボランティアの方が撮った写真や情報を SNS で発信すると良いのでは。ボランティアと入館者の方が間接的でも繋がるのが良い。

C 委員：

イベントについての質問もあったように思うが。

事務局：

教育普及活動については、今年度中は対面式のイベントを休止している。講座型は十分な

対策を取って、夏から再開している。来年度については協議中だが、コロナ禍でもできる形式で行っていききたい。

事務局：

ボランティアによる有志の野外調査も、緊急事態宣言解除後は再開している。機会と人数は減っているが、少人数で感染対策を行いながら実施している。

F 委員：

化石展を見たが、とても良かった。リアルなものを見るとわくわくする。子どもたちにも見せたいが、水戸からだだとバスで1時間かかる。バスの中で密になってしまう事を考えると来館が難しい。遠足は学年ごとに行く場所が決まっていて、小学校6年間の中で、1年機会を逃してしまうと、博物館に来る機会を失ってしまう。オンライン授業を行っていると感じて、とても良いと思った。職場体験もオンラインで行っていて感心した。4月から子どもたちは1人1台タブレットが支給されてオンラインの調べ学習が始まる。そういうときに、ちょっとした教材が博物館のサイトにあると良い。また、そのような案内を配ってもらえると良い。大人でも、オンラインで博物館の裏側を体験するツアーがあると人気が出るかもしれない。YouTuber に来てもらって紹介してもらおうなど。そのようにオンラインを発展させると良いと思う。

事務局：

今年度は講師派遣をオンラインで行った。教材は、すぐには難しいが、ワークショップなどのプログラム集を公開しているので、参考にいただければと思う。標本のデータベースを当館 HP で公開しているが、一つ一つの教材は、まだ当館では作成できていない。まずはプログラム集などを活用していただければと考えている。コロナ禍で遠足に来づらいということもあり、今年度は移動博物館の希望がとても多かった。そのような機会も利用していただければ。

事務局：

色々な博物館で「おうちで博物館」というインターネット上の取り組みをしている。当館でも、さくら展の時には、休館中に YouTube に動画を10本ほど公開した。ゼロから動画を作るのは大変だった。深海展やブナ展では、展示室用に製作した映像を公開する試みを進めている。

事務局：

ポケット学芸員のアプリもオンラインで利用できるのも、学校でも活用していただきたい。

C 委員：

学年ごとの教材として教科書に対応して使ってもらえるものはどのくらいあるのか。

事務局：

博物館では残念ながら教科書に合わせている教材としてすぐに使ってもらえるものはない。

F 委員：

教科書の内容と博物館の教材にずれがあることがある。教科書のページと対応していると良い。

事務局：

教育用貸出資料の作成は進めているが、オンラインのものはまだ難しい。

事務局：

学校教育分野に特化した注力は現実的に難しいところもある。デジタル教科書が学校で広がってきているので、そういったものの方が使いやすいのではないか。

C 委員：

全国規模の教科書会社で作るデジタル教科書などだと、世界的に有名な資料ばかりになってしまう。地元の資料もぜひ生かして欲しい。

G 委員：

以前始祖鳥を借用して利用したが、専門ではないので解説や扱いに苦勞した。貸出資料と YouTube の動画をリンクさせると先生方も使いやすくなるのでは。

来館者のデータで感動したのが、来館者は激減したにもかかわらず、友の会の会員はほとんど減っていないこと。それだけ博物館が愛されているということではないか。良い企画展、丁寧な展示、常設展への移設など、それらの姿勢が受け入れられているのでは。事前入館システムを体験したが、とても使いやすかった。忙しいときでも簡単にわかりやすくてよかった。令和 3 年度の計画で、ジュニア学芸員養成講座のスケジュール変更に賛同したい。5 月 6 月で勉強して、夏休みの自主的な活動を促すことができる。

3 月 4 日に都内の聾学校が来館し、補助をする予定をしていたが、残念ながら緊急事態宣言の延長で来られなくなってしまった。試してみたかったのが、聞こえない方に音声文字化するアプリを使用することや、手話で案内ができるボランティアを育てること。機会があればお手伝いさせていただきたい。特に、聞こえない方は、皆マスクをしているので、口の

動きを読み取れずに不便な思いをしている。筆談も、手間をかけて申し訳ない気分になる。アプリなどは気軽に使えて良い。

未来の話ができるのであれば、ポケット学芸員を楽しませていただいているが、現在はVRやARの技術が進化しているので、そのような技術を用いると、非接触型でさらに楽しめるのではないかと。スミソニアンでデモを見せてもらったことがある。

事務局：

ご協力の申し出に感謝したい。コロナ禍で、ハンズオン展示を休止せざるを得ない状況。目の不自由な方には厳しい環境だと思う。耳の不自由な方に関してご提案いただいた案内等の対応を、今後に向けて研究をしていきたい。

また、開館当初の映像には、見にくくなってしまっているものも多い。今後に向けて、常設展のリニューアルを強くやりたいと思っているところだが、その際に視覚的な最先端の技術を取り込んでいきたい。予算との兼ね合いがあるが、長い展望で考えていきたい。

H委員：

化石研究所展を見せてもらって、全て自館の資料を展示したと聞いて感動した。それは博物館の実力を示していると思う。資料について、予算のページで、歳入がどんどん増えているのに、令和2年度の歳入が大幅に減っている。大丈夫なのか。

事務局：

資料に示した歳入は、主に入館料収入からなる自己収入である。歳入に係る県の予算は、大きく減額されることはない見込みのため、少なくとも来年度は予算上で大きな問題は無いと思われる。

事務局：

今年度は実際に入館料収入が下がっているので、ある程度予算の執行は節約して、使わなかった分は県に返還する方向で進めている。

H委員：

前回（令和2年度第1回）の事業計画と、今回の実施報告を比べたが、総合調査のことなど、今回無い項目と、新たに追加された項目がある。項目を対応させて、それぞれの説明が欲しい。

事務局：

総合調査についても進めているが、具体的な数値が資料作成時点で出しづらかったため、はっきりと目星が付いている項目を優先してしまった。説明不足で申し訳ない。



H 委員：

データベース登録率が分野によって大きく違い、植物は高く、動物は低いが何か事情があるのか。

事務局：

動物分野は、個体数が多く収集される昆虫や微小な動物などの登録が追いつかない。粛々と進めていきたい。

H 委員：

博物館の実力を上げるためには職員の実力を上げる必要がある。実力を上げるには「評価」が大事。私の所属機関では、研究員は年報で論文や学会の役員を書くが、それだけでは頑張りが見えない面もあるので、活動報告書を作成している。科研費の書類のように、それぞれの業務にかけたエフォート率を出してもらっている。自分の意識と他者からの評価の両方が参考になる。茨城県自然博物館では評価システムはどのようにしているのか。

事務局：

評価については、県の人事評価システムを実施している。学芸系も事務系も、年度初めに目標を 3 点ほど立て、長期、中期、短期で目標を設定し、目標の妥当性も含めて面談を行う。年度の間と年度末のヒアリングを行うとともに、職員は自己評価を行う。それらを踏まえて、評価するという手法である。自分としては、特に職員との面談を通してやる気を引き出すことを大切にしている。

H 委員：

実状と評価がずれ違ってないか不安である。県の評価ではなく、博物館の独自の評価も必要では。より博物館の力になるための評価システムがあると良い。

事務局：

決められた評価システム以外での資質向上としては、企画展をチームで運営することが挙げられる。職員間の切磋琢磨を通して、企画展を少しでも良いものに近づけていく。このような仕事がトレーニングになっているのでは。

C 委員：

予約システムについて、これからゴールデンウィークがあるので、クレームが殺到しないように気をつけて準備していただければと思う。